

Pro-Life and Artificial Womb.

プロライフと人工子宮

Dr. Bruce Blackshaw

Q. 自己紹介をお願いします。

もともと数学と物理の教師だった。大学に戻ってITを学び、ソフトウェア会社を共同設立して現在に至る。その後、哲学を学ぶために大学に戻った。現在、バーミンガム大学で早期生命の倫理に焦点を当てた研究で博士号を取得したいと考えている。博士論文のテーマは、中絶倫理に対するプロライフ派の批判とその反対側からの議論についてである。2024年末に博士論文を提出する予定。以前はロンドンに住んでいたが、現在はオーストラリアのブリスベンを拠点に遠隔で研究中。博士号取得後も、倫理学の分野で研究を続けたいと考えている。

Q. 2021年の論文に関して教えていただけますでしょうか。

プロライフの立場から、胚には道徳的な地位があり、実験などされるべきではないと考えている。この論文では、14日ルールの起源と、その発足が、委員会に出席したほとんどの関係者（さまざまな立場の人たち）を満足させる現実的な決定であったことを探っている。この点は今も変わっておらず、国民の信頼を維持するためにも、当面は14日ルールを堅持すべきだと主張している。委員会は、14日

以前に決定的な人格形成がなされることはないという考えに基づいた根拠を打ち出していた。当時、研究者が胚を培養できるのはせいぜい7日間だったので、彼/彼女らは喜んでそれに従った。

この論文は、「胚の実験は悪である」という厳格な立場から書かれたものではなく、より現実的で、現在の制限を支持するも。この論文が特に影響力のあるものだとは考えていないが、このテーマに関するさまざまな視点を強調するために何度か引用されている。

Q. 2020年の論文に関して教えていただけますでしょうか。

この論文が発表された当時から、現時点では実用化されていないにもかかわらず、人工子宮の影響についてさまざまな憶測が飛び交っている。2019年頃には、バイオバッグと子羊の胎児を使った実験が成功した。短期的には、人工子宮技術の主な用途は新生児集中治療の代替となるだろう。22週で生まれた胎児は予後の見通しが悪く、しばしば長期的な障害を被る。人工子宮テクノロジーは、おそらく未熟児の見通しを改善し、信じられないほど役に立つだろう。

哲学者たちは、人工子宮技術を完全な体外発生に拡大することについて推測するのが好きだ。これが何十年かに可能になるとは考えていない。人工子宮は妊娠する人を完全に排除してしまうので、“胎児殺”(gestaticide)の問題が出てくる。人工子宮の中にいる胎児を殺すことは可能か? という問いだ。

Q. 胎児の生存限界 viability はどこまで改善されると予想しますか？ それはどのような影響を及ぼしますか？

できるだけ多くの新生児を救おうと、生存可能な時点を押し戻そうとするのは必然だ。今後数十年間は、そうやって技術が進歩していこう。人体実験に関する懸念は、ほぼ解消されるだろう。生後 22 週目の新生児について、人工子宮の内部と外部とで比較的早く結果がわかるので、その利点はかなり説得力のあるものになるだろう。もし、早産の新生児が死んでしまうのであれば、多くの人は生存可能期間をできるだけ遅らせることに賛成するだろう。

Q. 14 日ルールの緩和や撤廃に関する世界の議論はどのくらい進んでいますか？ どんな議論が必要でしょうか？

過去 12 ヶ月の議論については把握していないが、廃止が可能な国もあると信じている。それは国によって異なるし、他の国ほど厳密ではない国もある。例えば、中国にはイギリスやアメリカで行われているよりもさらに踏み込んだ実験を行った研究者がいる。科学の分野には、規制がまだ十分に整備されておらず、科学の進歩が法律の先をいっているところもある。14 日ルールの廃止は避けられないと考えている。

Q. カトリック教会など宗教の動きについては？ コメントはありますか？

カトリック教会は、体外受精やその他の ART 治療に反対する強い声明を出している。14 日間はもちろん、28 日間に延長す

ることもまったく支持していない。倫理の面では、カトリック教会はプロテスタントなど他の宗派よりも進んでいる傾向がある。英国国教会のコメントについては情報を持っていない。

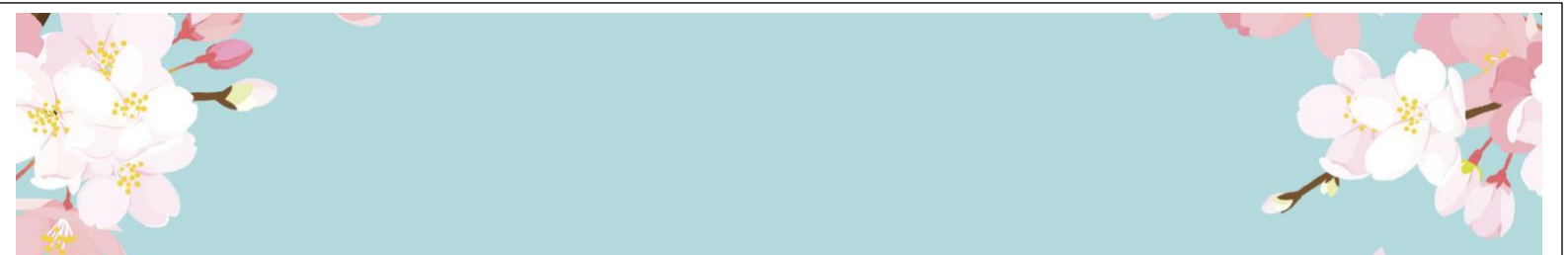
自分はクリスチャンだ。このことが自分のプロライフの信念に影響していることは間違いないが、実は無神論者の家庭で育った。常にプロライフの信念を持っている。倫理的な側面を検討する世俗的なプロライフ研究者グループの一員である。

Q. 女性の子宮の中の胎児/人工子宮の中の胎児では異なる道徳的地位が割り当てられるべきですか？

道徳的地位については多くの理論があり、そのほとんどは胎児に関する本質的な構成要素に基づいている。これらの要因は、胎児が胎内にいるか人工子宮の中にいるかによって変わるものではない。例えば、サウスハンプトン大学の研究者グループは、人工子宮内の胎児は特定の生理学的差異により、まだ「生まれていない」と主張している。

Q. 女性が妊娠の継続を希望しない場合、胎児を取り出して人工子宮で養育するという選択肢が与えられるべきでしょうか？ それはどんな意味を持ちますか？ 影響がありますか？

中絶をするのなら、それよりは人工子宮での妊娠が望ましいのは確かだ。しかし、体外受精と同じように、この技術が人間の発育に与える影響を知ることができるのは、使用後何年も経ってから。これは推測の域を出ない実験だ。



このような状況下で、費用を誰が出すかや、誰が子どもの面倒を見るかという現実的な問題についても議論がある。人工子宮は、最初は非常に高価で、主に経済的に余裕のある人専用となるだろう。もし国家が中絶の廃止を義務付けたいのであれば、そのための資金と補償を提供しなければならないかもしれない。

Q. 人工子宮の開発のために体外受精クリニックに保管されている受精卵を使用することは許容されますか？ どのような条件が必要ですか？

人体実験を行うべきだとはまったく考えていない。だから、より小さな悪、つまり、胚を養子にしてくれる人が現れるまで凍結保存しておくということになる。アメリカには約 100 万個の凍結胚があり、その大半はおそらく望まれないものである。あるものは科学のために提供され、あるものは親が研究への提供を許可しない。この「凍結胚問題」は、カトリック教会が体外受精を支持しない理由のひとつである。

自分の見方によれば、体外受精産業が何百万もの胚を作り出し、また多くの胚を破壊してきたというものである。自分はこれを支持しない。体外受精は凍結保存を必要としない方法で、より倫理的に実施できると考えている。この業界は規制が緩く、数え切れないほどのミスが報告されている。にもかかわらず、体外受精産業は多くの人々に多くの喜びをもたらしてきた。

Q. 人工子宮(full ectogenesis)の開発のために人の受精卵を使い、最終的に失敗することは許容されますか？

完全な人工子宮というアイデアは好きではないが、中絶の代替案としては有用だと考えている。まずはちょっとした実験になるだろうし、どのような影響があるかはわからない。自分は少しアンビバレントで、中絶の議論への影響については懐疑的である。

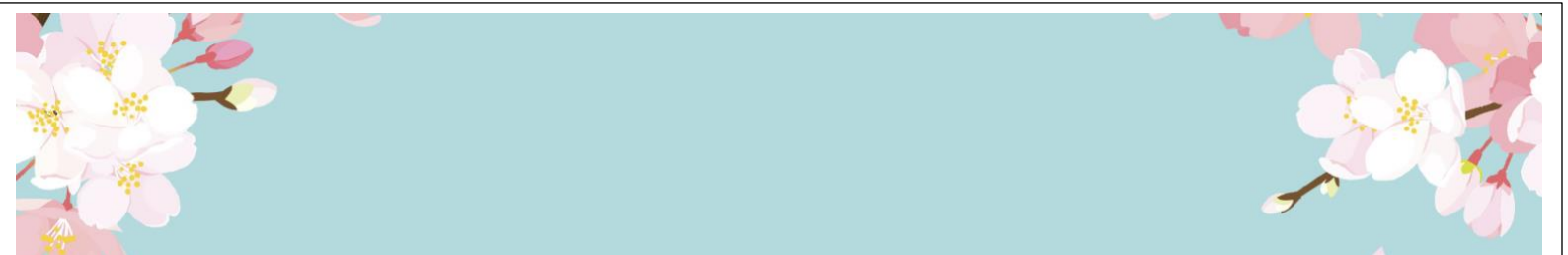
Q. 人工子宮の開発のために、人工胚や人工配偶子を用いることについてはどう考えますか。

これは倫理的に疑わしいと考えている。卵子や精子が人工的に生産できるのであれば、それが通常の配偶子と区別がつかないことを確認できる限りは問題ないのかもしれない。主に人体実験について懸念している。卵子や精子を使った実験には何の問題もないが、いったん受精してしまえば、自分はそれを人間だとみなすので、実験してはならないと考える。

Q. 受精卵や胎児、人工子宮に対する態度、文化による多様性はあると思いますか？

主に交流しているのは、イギリスとアメリカのプロライフ研究者たちである。彼/彼女らの見解に関する議論や討論はあまりない。伝統的なカトリック教徒は体外受精にそもそも反対だから。

Q. 人工子宮の開発に向けての競争、研究費の獲得は盛んですか？ 研究者の関心、または政府の関心の程度について、どのように感じていますか？



大衆記事で人工子宮への言及を目にするようになった。この5年間で、よりポピュラーでアクセスしやすいメディアに登場してきたようだ。勢いを増し始めているとはいえ、議論はまだ実際に可能なことよりもかなり先を行っている。

人工子宮が現れる前に倫理的な影響を検討することは悪いことではない。SFは人々に問題を考えさせるという点で有用だと考えている。哲学の世界には、より多くの人々にアイデアを理解してもらうために、ポピュラーなメディアを活用しようとするものがたくさんある。

Q. その他

部分的な人工子宮は今後10年ほどで現実になると考えている。少なくともあと50年は完全な人工子宮が実現するとは考えていない。短期的には、人工子宮へのアクセスは、お金を持っている人に限られるだろう（エベレスト登山のようなものだ）。NHS、特にNICUのある病院が新生児への人工子宮の早期導入者になるだろうと予測している。アメリカには私立病院が多く、資金も豊富であるため、この技術が証明されれば、急速にこの技術を採用するだろう、と想像している。患者が誰であるかに関係なく、完全な人工子宮へのアクセスはお金で決まる。

商業的代理出産を非常に疑っている。商業的代理出産は搾取へのオープンドアだと考えている。利他的な代理出産は少し違う。自分の妹が自分のために赤ちゃんを身ごもると、お金を必要とする他国の赤の他人が身ごもるとは違う。これは倫理的な分かれ目となる。現段階

で、人工子宮で胎児を妊娠出産することの結果が未知数であるため、完全な人工子宮よりも利他的な代理出産が望ましいと考えている。

女性の子宮移植には何の問題もないが、男性が子供を持つために子宮移植をするという考えには疑問を持っている。子供への副作用の可能性については情報を持ち合わせていない。

(2024年7月)

Dr. Bruce Blackshaw

バーミンガム大学で人工妊娠中絶の倫理に関する研究で博士号を取得するため、ブリスベンに滞在しながら研究を続けている。

Blackshaw BP, Rodger D. 2021 Why we should not extend the 14-day rule. J Med Ethics 47(10):712-714.

Rodger D, Colgrove N, Blackshaw BP. 2020 Gestaticide: killing the subject of the artificial womb. J Med Ethics 30:medethics-2020-106708.